

『同志社社会学研究』編集規定

【1】本研究誌は同志社社会学研究学会の機関紙として社会学の研鑽に寄与し、また会員相互の研究交流に資することを目的とする。

【2】掲載内容は以下のものとする（枚数：400字）

研究論文（40～60枚）

研究ノート（20～30枚）

書評

その他

【3】編集委員は本学社会学科教員、同院生、同修了・卒業生の代表により構成される。専門委員は本学社会学科教員より構成される。

【4】投稿者は本学社会学科教員、同院生、同修了・卒業生とする。

【5】原稿は書籍、学術雑誌に未発表のものに限る。掲載の可否は、専門委員の審査の結果を受け、最終的に編集委員が行う。

【6】原稿の締め切りは12月末、発行は3月とする。投稿者は10月末までに専門委員1名に草稿を送付するとともに投稿の意思を伝え、12月末までに当該専門委員に最終原稿を送付しなくてはならない。

【7】執筆要領

横書き、口語常体、完成原稿で提出。註や参照文献の書式は日本社会学会機関誌『社会学評論』に準じ、論文の最後に別々にまとめる。詳しい執筆要領は別に定める。

【8】提出原稿の形式

原稿には日本語と英文タイトルをつけ、ハードコピー（40字×40行）と電子媒体で提出すること。

【9】執筆者の原稿は、同志社大学ホームページ上の「同志社大学学術リポジトリ」上に公開することを原則とする。

【付記】

その他の事項については、社会学の研究誌としての性格に鑑み、編集委員会が対応する。

（2009. 7. 26 改正）

◆ 研究室だより ◆

2010年度の社会学研究室は、森川先生と板垣先生が在外研究から帰国され、8名のスタッフが揃いました。おかげさまで全員が元気で国内外で活躍させていただいています。そして秋学期からは、9人目のスタッフ（助教・任期5年）としてファビオ・ギギ先生が赴任されました。ギギさんはスイスのご出身ですが、テュービンゲン大学に学び、ロンドン大学で学位を取得された文化人類学の俊英です。高校、大学、大学院と何度も日本に留学経験を持ち、美しい日本語（その他多くの言語）を話す方です。ご研究のテーマ「片付けられない女」については、本号に寄稿された巻頭論文をまずはゆっくりとお読みください。

大学院でも大きな変化がありました。西丸良一、ニコールコマファイ、多喜弘文の3君が学位論文を提出し（審査中）、山本圭三君も就職が決まり、それぞれ大学院を出ることになりました。社会学研究科が開設されてから進学してきた第一世代が巣立つに際して、彼らの一層の飛躍を楽しみにすると共に、今後ともOB・OG諸氏からのさらなる叱咤激励をお願いする次第です。

もうひとつ、うれしいニュースとして、本学の特定任用研究員（助手）で、社会学科でも講義や実習を担当いただいた河口充勇さんが、東京女学館大学に専任教員として就職されました。また、河口さんが社会調査実習と重ねて長年取り組んでこられた伏見酒造業に関する研究成果『産業集積地の継続と革新』（藤本先生との共著）に対して、平成22年度中小企業研究奨励賞が与えられました。地道な研究と教育の努力がこのような形で認められることは本当にうれしく有り難いことだと思います。やんちゃな社会学科の学生たちとも懲りずにお付き合いいただき、この場を借りて重ねて感謝申し上げます。

さらに、今年度は、社会学専攻出身で、現在は同志社女子大学助教の越智祐子さんが博士論文を提出され学位を得られました。前期課程でも、8名が修士論文を提出しました。学生・院生たちに負けないように、教員側も研究教育に精進せねばなりません。

本誌編集も大詰めに近づいた3月11日に東日本大震災が起き、多くの命が失われ、なお多くの方々の生活が危険に瀕しています。この災害は、社会学や人類学にとって何を意味しているのでしょうか。ギギ論文が問いかけているように、近代の社会学が前提としてきた概念、特に「エージェンシー」とは何かをもう一度、考え直す必要がありそうです。本誌が新しい社会学を構想する実験室にもなればと思います。会員の皆さまの投稿をお待ちしています。

（鶴飼）